

4. 血小板凝集抑制剤を用いた肝転移抑制の実験的研究

(外科学第三) 佐嶋健一、木村幸三郎、中島厚、加藤孝一郎、永楽仁、久保内健生

【目的】血小板凝集抑制剤による肝転移抑制効果の検討

【対象】6～8週令雌Balb/cマウスに可殖性大腸癌Colon26によって作製した肝転移モデルを対象とした。血小板凝集抑制剤は、PGE₁、PGI₂、OKY-046を用いた。

【方法】PGE₁、PGI₂、OKY-046をColon26細胞接種30分前、24時間後、48時間後にi.p.しControlとして生食を同様にi.p.した。評価方法は細胞接種後17日目に屠殺し、肝表面転移結節数を算定した。

【結果】Controlと比しPGE₁ 10および20μg投与では有意に増加し、PGI₂ 20μg、OKY-046 0.5、2.0、10mg投与では有意に減少した。

5. 水溶性ヨード造影剤の凝血学的性質とヘパリンの併用についての基礎的検討

(臨床病理学) 山岸哲也、福武勝幸

非イオン性造影剤(NICM)を用いた血管造影検査中カテーテル内に凝血塊を形成したという報告が散見される。血液凝固系に対する造影剤の影響について検討したところ、NICMの抗凝固作用がイオン性造影剤(ICM)に比べ弱いのは、FXaの生成より上位の血液凝固過程に対する阻害が少ないためと考えられた。一方トロンビンによるフィブリン形成の過程に対する阻害作用にNICMとICMで差を認めないが、トロンビンの合成基質切断能は高濃度の造影剤存在下でも安定であり、この作用はトロンビンに対する直接的なものでなく、トロンビンとフィブリノゲンの親和性に造影剤が影響していることが示唆された。また高濃度の造影剤存在下でもATIIIのヘパリン・コファクター活性は安定で、ヘパリン生食によるフラッシングがNICMを用いた血管造影検査施行中にカテーテル内の凝血塊形成抑制に有用となっていることが凝血学的にも裏付けられた。

6. 抗リン脂質抗体陽性妊婦に対する大量γ-globulin療法のサイトカインに対する影響

(産婦人科学) 柳下正人、鈴木康伸、星野泰三、高山雅臣

現在、抗リン脂質抗体陽性の習慣性流産に対して、ステロイド、低用量アスピリン療法などが行われているが、今回我々は大量γ-globulin療法を単独で行い、良好な結果を得た。大量γ-globulin(400mg/kg/day×3～5day)投与後早期に、Lupus anticoagulant、抗カルジオリピン抗体の陰性化と低下、及びAPTTの改善を認め、膠原病合併例では他の自己抗体の低下も認めた。γ-globulinの作用機序を考える上で、投与前後の患者血清の単核球を分離しRT-PCR法によりmRNAの発現を検討したところ、すべての症例で投与後早期よりIL-1βのバンドを検出し、分泌型IL-1レセプターのantagonistは誘導されなかった。γ-globulinは一般的には免疫抑制的に作用すると考えられているが、今回に結果によりIL-1を始めとするサイトカインの発現を促進する可能性もある。大量γ-globulin療法は抗リン脂質抗体症候群、膠原病合併妊娠において有効な治療法である事が示唆された。

7. 抗プラスミン剤が有効であった消費性凝固障害を伴った胸部大動脈瘤の一例

(外科学第二) 矢尾善英、土井信、土田博光、秋元直人、平山哲三、石川幹夫、石丸新、古川欽一

胸部大動脈瘤に伴った消費性凝固障害に対し抗プラスミン剤であるトランサミンを投与し改善が得られた症例を経験した。症例は80歳、男性で、閉塞性動脈硬化症にて入院し、精査の結果胸部大動脈瘤をみとめ、高度の凝固異常を伴っていた。血液凝固線溶系の詳細な検討にて一次線溶の亢進が強く認められ、血中プラスミンの著しい活性化がその原因と考えられた。このためトランサミンを投与したところ、高度な凝固異常は改善した。大動脈瘤における消費性凝固障害では一次線溶の亢進によるフィブリノーゲンの分解もその一因である症例も存在することが明らかとなった。